



○保護者にお願いしたいこと

- 原籍校の教員や院内学級の教員、医療者との間で、情報のつなぎ役等、懸け橋の役割を果たす。

病気になって不安を抱えている本人にとって、保護者の方は一番安心し頼りにできる存在です。また、関係者の中で本人のことを一番理解しているのも保護者の方です。高校生等年齢があがれば本人が仲介することも可能かもしれませんが、本人が関係者への連絡をすべて行うのは負担が大きいです。そのため、関係者の間に入って連絡内容を取り次ぐ際は、本人のことを分かっている保護者の方が積極的に行えるとよいです。

また、病気のことや入院先等は個人情報に関わることがほとんどです。原籍校の教員や医療者が復学や治療のために相談したいと思うことがあっても、なかなか直接連絡できないときも多いので、保護者の方はできる範囲でそうした関係者のつなぎ役を果たしていけるとよいです。

- 復学時に、原籍校の仲間にどのように病気のことを説明するか、本人や医療者と相談し、準備しておく。

どのように自分の病気のことを説明するのか、まずは本人の意思を尊重することを優先しましょう。「病気に関わる対応を自分で決められる」という思いは、治療に向かう意欲向上の一助となります。病名は伝えるのか、お見舞いは受け入れるかなど、入院期間中に原籍校の仲間へ説明する必要があるなら、本人と相談して決めたことを原籍校の教員に伝えておきましょう。

また、退院後、復学する際に本人が自分の病気について説明する機会がある場合には、そのとき自分で説明ができるように病気についての理解を深めておく必要があります。病気によっては、退院後も長期的に治療や経過観察が必要になることもあるため、病気理解が自分の身体について知るという自己理解につながることも踏まえて、本人への支援ができるとよいです。

- **兄弟姉妹の様子の変化に気を配る。**

入院中も入院時と同様に、保護者は病気のお子さんへ多くの意識を向けがちで、自宅にいる兄弟姉妹は、自分が大切にされていないような気持ちを抱くことがあります。しかし、そうした不満は、家族を心配させないようにと、表に出さないことが多いです。また、入院しているお子さんの学級の仲間が、兄弟姉妹に詳細を聞きに来ることもあるでしょう。こうした状況下にある兄弟姉妹が、普段通りのことを普段通りしてくれるだけでも、保護者の方にとっては助かることもあるのではないのでしょうか。そうしたささやかでも大切な協力に対し、「ありがとう」「助かるよ」等と言葉をかけることだけでも兄弟姉妹の心の安定につながると思います。

- **不安なことは原籍校や院内学級の教員、医師、看護師等に相談する。**

病気のこと、学校のこと、保護者自身の生活リズムの変化等、不安はたくさんあると思います。ですが、それを放置しておくことさらに悪い方向へ考えてしまったり、本人の不安を増長したりすることにつながります。「こんなこと聞いてもいいのだろうか」等と遠慮せず、わからないことや不安なことは教員や医療者に伝え、一人で抱え込まないようにするとよいです。その際は、「何に対して不安を抱いているのか」「どうなることを恐れているのか」といった不安の中身を具体的にまとめてメモしておくことで、ご自身の中で不安の中身を整理でき、伝える際に簡潔に伝えることにも役立ちます。